

經典餘師

近思錄

五

□ 11
2047
37



2049
37
稀卷

政事の類凡て六十四條

伊川先生上疏曰夫鐘怒而擊之則武悲而擊之則哀誠意之感而入也人於告亦如是如古人齊戒而君告所

臣前後兩得進講未嘗敢不

近思錄餘師卷之十

政事類凡六十四條

此段は政務の交代り君小つ之下民を撫育するのケタホなり

伊川先生上疏曰夫鐘怒而擊之則武悲而擊之則哀誠意之感而入也人於告亦如是如古人齊戒而君告所

臣前後兩得進講未嘗敢不

宿齊預戒潛思存誠觀感動於上心

誠存於上之心感動於上心

若職事不當其思慮紛紛

其思慮紛紛待至上之命

然後其辭說善徒頰舌感人不

亦淺乎

伊川人之奏藁示公答書云

為願公民之愛

宿戒之責身清之預戒之責

觀公之意專以畏亂為主

使營營於職事紛紛其思慮待至上

前然後善其辭說徒以頰舌感人不

亦淺乎

伊川答人示奏藁書云

願欲公以愛民為先力言百姓饑且

死丐朝廷哀憐因懼將為寇亂可也

不惟告君之體當如是事勢亦宜爾

求財以活人祈之以仁愛則當輕財

而重民懼之以利害則將恃財以自

保

惟君小告之體當如是事勢亦宜爾

小是之如小不事勢亦宜爾

亦宜爾

懼おそるはるる利害りがいと
 及およびてする則すなはちは將まさふ財
 をもつて以もつては自みづか保まもるる
 古いにし之の時とき丘あき民たみとし得えるる
 則すなはちは天あま下のとし得えるる
 後のち世よ兵へいをもつて以もつては民たみと
 制せいする財さいをもつて以もつては衆しゆをもつて
 者ものとし能よくは守まもるるとし民たみ
 とし保まもるる者ものとし遠とほくと
 とし為なする
 惟ただ當あたふる誠まこと意いをもつて
 感動かんとくする其その忍しのぶる心こころ
 有あるるとし觀みるるにもつて已まり
 明あき道みち邑むらをもつて以もつては民たみの
 事こと及およびて衆しゆ人ひとのし謂いふる
 法はをもつて拘とどめる者もの多おほしく然しかしも
 未いまだに

とするにもつて只ただひくふる金かね銀ぎんのり利りをもつて時ときに下
 こもつて小こ財さいをもつてたのをもつて仁に義ぎのこうをするにもつて一いつつとも
 古いにし之の時とき得えるる丘あき民たみ則すなはちは天あま下のとし得えるる
 のし得えるる時ときに下のし得えるる時ときに下
 手てをもつて入いるるにもつて後のち世よ以もつては兵へいをもつて以もつては財さいをもつて
 聚あるる衆しゆ聚あるる財さい者もの能よくは守まもるる保まもるる民たみ者もの為なする近ちかくと
 とし保まもるる民たみをもつて懼おそるるにもつて制せい令れいをもつて以もつては民たみをもつて
 軍いくさ衆しゆをもつて以もつては制せい令れいをもつて以もつては民たみをもつて
 仁に義ぎをもつて以もつては民たみをもつて保まもるるにもつて惟ただ當あたふる以もつては誠まこと意いをもつて
 人ひとのし謂いふるにもつて遠とほくととし為なするにもつて惟ただ當あたふる以もつては誠まこと意いをもつて
 其その有あるる忍しのぶる心こころ而しかしも已まりとするにもつて惟ただ當あたふる以もつては誠まこと意いをもつて
 説いふるにもつて人情にんじやうのし忍しのぶる心こころをもつて觀みるるにもつて已まりとするにもつて惟ただ當あたふる以もつては誠まこと意いをもつて
 心こころをもつて觀みるるにもつて已まりとするにもつて惟ただ當あたふる以もつては誠まこと意いをもつて
 事こと多おほしく衆しゆ人ひとのし謂いふる法はをもつて拘とどめる者もの然しかしも為なするにもつて未いまだに
 明あき道みち為なする邑むら及およびて民たみ之の
 事こと多おほしく衆しゆ人ひとのし謂いふる法はをもつて拘とどめる者もの然しかしも為なするにもつて未いまだに

いまだに未いまだに
 嘗た大おほしく法はをもつて於おのの法は亦また不なくも甚た甚た駭おそるる
 之の志こころざしをもつて伸のぶる
 可よくも小こ補おぎなふるとし求もとむる則すなはちは不なくも遠とほくと
 今いま之の政せいをもつて為なする者もの
 小こ過とほるるにもつて遠とほくと
 人ひと之の志こころざしをもつて伸のぶるにもつて雖しかしも不なくも至いたるる
 指さするにもつて為なするにもつて不なくも至いたるる
 之の志こころざしをもつて伸のぶるにもつて雖しかしも不なくも至いたるる
 則すなはちは大おほしく駭おそるる矣や誠まことと
 不なくも後のち去いるるにもつて又また何なに
 とし嫌きらむる乎や

嘗た大おほしく法はをもつて於おのの法は亦また不なくも甚た甚た駭おそるる
 泥ぬにもつて危あやふる有あるる来きのし日ひ法はをもつて拘とどめるにもつて人ひとのし常じやうにもつて先せん生せいのし拘とどめる
 衆しゆ人ひとのし駭おそるるにもつて謂いふるにもつて得えるるにもつて伸のぶるにもつて其その志こころざし則すなはちは不なくも遠とほくと
 求もとむる小こ補おぎなふる則すなはちは過とほるる今いま之の為なする政せい者もの遠とほくと
 是こゝにもつて式しきをもつて得えるる志こころざしをもつて伸のぶるにもつて見みるるにもつて不なくも遠とほくと
 可よくも小こ補おぎなふるにもつて今いま之の為なする政せいをもつて過とほるる
 人ひと雖しかしも異ちがふる之の不なくも至いたるる指さするにもつて為なするにもつて不なくも至いたるる
 之の狂きやう則すなはちは大おほしく駭おそるる矣や盡つくる誠まことをもつて為なするにもつて不なくも容ゆるみを得えるる而しかしも後のち
 去いるるにもつて又また何なにとし嫌きらむる乎や
 先生せんせいのし作しやう所しよ先せん役やくのし所しよ為なするにもつて大おほしく不なくも遠とほくと
 先生せんせい至いたるる誠まことをもつて施し行ぎやうのし所しよ為なするにもつて上かみにもつて容ゆるみを得えるるにもつて上かみにもつて容ゆるみを得えるる

明道先生の巨命之士も苟も心於物に愛するに存する人か於て必ず済所有伊川先生の曰君子天水違行之象を觀て人情争訟之道有ることを知故凡そ作所の事必ら其始に謀らざる端と事の始り絶則に訟由て生ずるに無矣

○明道先生曰一命之士苟も存心於愛物於人必有所濟一命のこゝに前注せり死をうらむる生を本らる此人のうらむるす
○伊川先生曰君子觀天下とするの亦く
天水違行之象知人情有争訟之道故凡所作事必謀其始絶訟端於事之始則訟無由生矣
易の訟の卦と説のよこを天の上の方へのりて水の下の方へかゝる人の違ける小たよ依てりて争の起るその始り念慮絶時ハ公謀始之義廣矣若慎交事の生ずるを

類の若是也

結明契券之類是也

契券ハ人の手形證文なり

師之九二師之主為

○師之九二為師之主

專則下為之道

主 易の余師ハ説の九二ハ明知の大將の九五ハ明君なり是ハ孔子の諸君孔明思ふに

失專則不則

知謀を用たるは權公ハその身ハ孔明と 特專則失

功を成之理

為下之道不專則無成功之理故得

中為吉

中為吉 大將軍の役ハ孔子の九二ハ下知す 時ハ臣たるの道をうるしるハ又何

凡師之道威和

凡師之道威和

並至則吉也

並至則吉也 大將軍の所為といハ權威ありて

世儒魯周公祀

○世儒有論魯祀周公以天

天子の礼果

天子の礼果

則其是也見之
惡則其非也見之
小妻孥之言失也
雖而多從憎
所之言善言也
雖惡也為也

苟親愛之則以
而之隨則私
情之與所豈
正理小合んや故
隨之初九門を出
交則有功有也
隨九五之象曰嘉
于父子吉位
正中而也傳曰
隨中而得也

之言雖失而多從所憎之言雖善為
惡也
人の心はくく吾可愛がる則ち私己の心はくく
吾愛する是く悪く非ざるは外口はくく

以親愛而隨之則是私情所與豈合
也
妻孥の言の失事あるはくく憎むるはくく
の言の善言也

正理故隨之初九出門而交則有功
也
苟且も私情の親愛のひら随順して正理の
申さずして家内の私情を心につた

乎于嘉吉位正中也傳曰隨以得中
為善
正の上の中道なる時嘉吉く小孝有と
つたものく何莫も中正なる時吉善

善也為

隨之所防者過
也蓋心悅隨所
則其過也知矣
坎之六四曰樽酒簋
缶納約自牖
終無咎

傳曰此言
臣忠信善道以君
の心結して必其
明なる所の處自ら
人心蔽所有通
處也當其明處

隨之所防者過也蓋心所悅隨則
不知其過矣
過る道小背と知るべし

之六四曰樽酒簋缶納約自牖
終無咎
宴享に誠を用て樽酒の挑子ちる簋を

傳曰此言
人臣以忠信善道結於君心必自其
所明處乃能入也
傳に注する右の卦の心はく
君の心

人心有所蔽有所
明也當其明處
人心蔽所有通
處也當其明處

人心有所蔽有所
明也當其明處

小就而之告之
信と求ると則易
也故約と納と
備自云能易の
如る則艱險之
時と雖終に咎無
く得也

且君の心其荒樂於
蔽如唯其蔽
也故ちる用か
其荒樂之非と詆
雖其首不と如
何必於推而之
及ちる則能其心
を悟矣

通通者明處也當就其明處而告之
求信則易也故云納約自備能如是
則雖艱險之時終得無咎也

且如君心蔽於荒樂唯其蔽
也故爾雖力詆其荒樂之非如其不
省何必於所不蔽之事推而及之則
能悟其心矣

能悟其心矣
謙を申上りの道君荒樂小蔽
時とれを不直とて試み省改
を推せん不圖外の更かつて所不蔽し有時と
と推せん

古自能諫其君と謙
じ者未其明
ふ因不者有
也故小許直強
勁ちる者率多
忤と取而温厚
明弁ちる者其説
多し行

唯君於告者此の如
ちるの兆教と為
者亦然夫教必
六人之長し所就
長し所の者心之明
ちる所也其心之明
か所從而入然
後推其餘及す

自古能諫其君者未有不因其所明
者也故許直強勁者率多取忤而温
厚明辨者其説多行

非唯告於
君者如此為教者亦然夫教必就人
之所長所長者心之所明也從其心
之所明而入然後推及其餘孟子所
謂成德達才是也

君の心之明
教も同断く人の得手

則時有而獨異
 大則同而能不同者
 常也亂理之拂之
 人也獨異者
 能不同者俗小隨
 非也習之人也同
 而能異者在
 而要之耳
 睽之初九睽之時
 當而同德者相
 與雖難也然小人
 乖異者至
 衆若棄絕之無絕
 天下之尺以

天理之常莫不大同於世俗所同者
 則有時而獨異
睽之初九睽之時
 世小居於事處置天の理の常定の自然
 世の風俗と同断ちるも時が異ちるも有
 不能大同者亂常拂理之人也
 能獨異者隨俗習非之人也要在同
 而能異耳
世の常定は拂乱が人少く決して同
り又世の風俗も同断ちて非異小
 睽之初九當睽之
 時雖同德者相與然小人乖異者至
 衆若棄絕之不幾盡天下以仇君子

君子仇之
 不爭
 此如之則含含
 之義と失凶咎と
 致之道也又安能
 不善を化而之と
 合使乎
 故必乎惡人見
 則咎無也古之聖
 王能茲凶と化して
 善良と為仇敵と
 革めて臣民と為所
 以者絶弗由也
 睽之初九睽之時
 當て君心未合
 賢臣下不在カ

乎
睽之初九
子何古も公大の時
君子小人を
思ふも却て仇をさすべし
 如此則失含
 弘之義致凶咎之道也又安能化不
 善而使之合乎
含はくむ弘はくむ君子
心ひろく万支心ひらふ
 故必
 見惡人則無咎也古之聖王所以能
 化茲凶為善良革仇敵為臣民者由
 弗絶也
右のてきから故小君子
悪人を角々敷
善良の二字は人としむらう仇なる人も
單改ちり弗絶といはちまうすてん

竭誠とて信を合は使は期を

至誠を以て之を感動

扶持し義理を明く

如宛轉して以て其の

遇は道を枉て逢ふ

非は僻也巷は非也

損之九二曰損弗ハ

其剛貞を損せ不能

乃は其の益也

柔說を用ひ適を以て

世之愚者邪心無し

損弗之を益之義也

○睽之九二當睽之時君心未合賢

臣在下竭力盡誠期使之信合而已

以感動之盡力以扶持之明義理以

致其知杜蔽惑以誠其意如是宛轉

以求其合也

逢迎也巷非邪僻由徑也故象曰遇

至于巷未失道也

○損之九二曰

弗損益之傳曰不自損其剛貞則能

益其上乃益之也

若失其剛貞而用柔說適

足以損之而已

世之愚者有雖無邪心而惟知竭力

順上為忠者蓋不知弗損益之之義

也

世の人の只邪心のみを以て忠義と爲る

損弗之を益之義と爲る

損弗之を益之義と爲る

損弗之を益之義と爲る

益之初九曰大作元吉無咎
為小用利也元吉無咎
言君子之於外象
小曰元吉者其外
無下厚事也
不傳曰曰下在者
者本當以厚事
處之也
重之大事也上在
事之以大事當所
以必能大事也
濟而元吉也致也
乃各無咎也
能元吉也致則上
在者之任也
知也為已之當

○益之初九曰利用為大作元吉無
咎象曰元吉無咎下不厚事也傳曰
在下者本不當處厚事厚事重大之
事也以為在上所任所以當大事必
能濟大事而致元吉乃為無咎
能致元吉則在上者任之為知人已
當之為勝任不然則上下皆有咎也
○革而無

有也
然不則上下皆咎
有也
革而甚益無猶悔
可也况反て害
乎古人改作と重
る所以也
漸之九三曰曰君子
利也傳曰君子
之小人與比也自
守正也
豈唯君子自其
已也完也而已乎
亦小人とて非義
於階不て得使
長順道とて相

甚益猶可悔也况反て害乎古人所以
重改作也
漸之九三曰利禦寇傳曰君子
之與小人比也自守以正豈唯君子
自完其已而已乎亦使小人得不陷
於非義
是以順道相保禦正
其惡也
初六曰旅瑣瑣斯其所取災傳曰志

天下之事其忠而
不盡其忠而
獄議死最其大者也
事時有而當過
所以從宜然豈可
過可也恭過如
哀過儉過則不可
小過宜也順乎
所以也能宜乎順
大吉也所以宜
小人防之道已
正乎先也
周公至公以私

天下之事無所不盡其忠而
議獄緩死最其大者也
○事有時而當過
所以從宜然豈可甚過也如過恭過
哀過儉大過則不可所以小過為順
乎宜也能順乎宜所以大吉
○防小人之道正已為
先 周公至公不私進退以道無利

不進退道以
利欲之蔽無
其已也處
也憂然其恭
畏之心存其誠
存也蕩々然
顧慮之意
無危疑之地在
雖而其聖不失
所以也
詩曰公碩小膚
赤鳥凡几

欲之蔽 小人進退以
其處已也憂然存
恭畏之心其存誠也蕩蕩然無顧慮
之意所以雖在危疑之地而不失其
聖也 吾身之
諸君之
公孫碩膚赤鳥凡几
朱塗之履 貴人之
重

採察求訪使臣之大務

明道先生與師禮
與介甫之學の錯處を談

師礼小謂て曰我爲に
に介甫諸達を以て
我亦未敢て自以爲是
如説有願往復せよ

此天下の公理彼我
無果して能明弁
益介甫于益有
益有ん

○採察求訪使臣之大務

明道先生與吳師禮談介甫之學

錯處

師禮曰爲我盡達諸介甫我亦未敢

自以爲是如有説願往復

此天下公理

無彼我果能明辨不有益于介甫則

必有益于我

天祺司竹小在

常用將代自見其人盜筍皮遂治

及皮之盜と見遂ふ

之と治て如も貸

無罪已に正して之

待て復初めの

不其德量此の如し

○天祺在司竹常愛用一

卒長及將代自見其人盜筍皮遂治

之無少貸罪已正待之復如初略不

介意其德量如此

因論口將言而囁嚅云

若合開口時要他頭也須開口須是

聽其言也厲

生付て益量

のい

言を聴也、所也、
 須是事、上、就、
 學、盡、民、振、
 德、然、有、所、
 知、所、有、後、方、
 能、此、の、如、何、
 然、後、書、を、
 先生、一、學、者、
 迫、ち、を、見、其、
 事、を、曰、幾、
 某、人、事、に、
 嘗、賢、の、急、
 乎、似、ん

と論じ、
 ○須是就事上學盡振民育
 德然有所知後方能如此何必讀書
 然後為學
 事業の上、就て、學問、工夫、
 人民を振、
 ○先生見一學者
 忙迫問其故曰欲了幾處人事曰某
 非不欲周旋人事者曷嘗似賢急迫
 忙迫、
 の人の事、
 つり、
 の人の曰く、
 先生人の、
 幾處人の、
 業と見て、
 悟と欲、

安定之門人往々
 古と猶民を愛
 也何有
 門人曰吾人
 與居其過有
 告不忠非也誠
 意之交通未
 言ぢら之於
 使、
 要、
 則、

と先生、
 次、
 其、
 ○安定之門人往往知
 稽古愛民矣則於為政也何有
 門人有曰吾與人居視其有過而
 不告則於心有所不安告之而人不
 受則奈何
 門人の、
 信實、
 日與之處
 而不告其過非忠也要使誠意之交

言出而人信矣

又曰善と責之道
誠餘有而言足
不使人於益
有而我在者自
辱辱無矣

職事ハ巧と以テ免
可不

是邦小居其大夫
非不此理最好

通在於未言之前則言出而人信矣

又曰責善之道要使誠有
餘而言不足則於人有益而在我者
無自辱矣

職事不可
以巧免

居是邦不非其大夫此理最好

克勤小物最難

是篤實凡為人言者理勝則事明

氣忿則招拂

居今之時不安今之法

令非義也若論為治不為則已如復
為之須於今之法度內處得其當方
為合義若須更改而後為則何義之

今之法度の内小
於其當れらに

空典余市

下六

克小物を勤最難
大任當欲れ
須く是篤實ま

凡お人の為に言者
理勝則事明ま
氣忿則招拂と
招く

今の時に居て今
之法を安んぜず
義非也治不れ
論ばらん若し
不則已ん如し
復之と為須く
今の法度の内小
於其當れらに

世渡いむつ有小さき
物のをりひいつく
欲當大任須

是篤實凡為人言者理勝則事明

氣忿則招拂
重さ大任の官とりひいつく時の權
威自由らになつて篤實をと

居今之時不安今之法

令非義也若論為治不為則已如復
為之須於今之法度內處得其當方
為合義若須更改而後為則何義之

處得方に
義合と為若更
改て而後為
何の義之有

今之監司多州縣
與一體不監司
州縣と伺察せ
んと欲州縣專
掩蔽せん欲誠心
を推て之共
治んか若不逮
所有ハ教可者
之を教督可者
之を督聽不干至
て其甚者

有

非義あり又官の道小いのみかたがら分かき
ぬゆき巴べい但し當今の法度の宜し不當
處得て義理小合とほるこそ
て更改る義とつよ
のにいりばらざる

○今之監司多不與

州縣一體監司專欲伺察州縣

專欲掩蔽不若推誠心與之共治有

所不逮可教者教之可督者督之至

于不聽擇其甚者去一二使足以警

衆可也
當代の風俗甚く州縣の監司と
農民と不一体あり奉行ハ百姓の内
ハ必竟誠實の人情と百姓ハ又掩蔽せん百姓乃

擇一二と去以て
衆を教言小使使
可也
伊川先生の曰人多
事と惡し或人之
と憫む世事多し
雖盡是人事
人事人
教不更誰做
を責ん

感慨身と殺
者易從容と
義不就
者難
人或先生の勸
に禮と近貴か

行届らば所へ
と教言むべ
督ハたよく不聽
心得た

○伊川先生曰人惡多事

或人憫之世事雖多盡是人事

不教人做更責誰做

有元來世に佳
心小
時有
人復有ハ常の定ヤリ
可為と行届る事有べ

○感慨殺身者易從容就義者難

感慨人の意氣地
常中の身と殺
身持
義小就
意氣地
命と

○人或勸先生以

人或先生の勸
に禮と近貴か

曰何責見先生の礼を以て而之を責す礼を以て而之を責す礼を以て而之を責す

或曰問簿と佐と不レ奈何曰當識意を以て之と動し不レ奈何曰當識意を以て之と動し不レ奈何曰當識意を以て之と動し

加禮近貴先生曰何不見責以盡禮

而責之以加禮禮盡則已豈有如也

令者也簿所欲為令或不從奈何曰

當以誠意動之今令與簿不和只是

爭私意令是邑之長若能以事父兄

之道事之過則歸已善則唯恐不歸

於令積此誠意豈有不動得人

欲直已無含容之氣是氣不平否

量隨識長亦有人識高而量不長者

是識實未至也

之小事過則已歸善則唯令於歸不恐此誠意之積豈人動得不有んや

曰固是氣平不亦是量狹人之量識隨長亦人の識高而量長不者有是識實未至

問人於議論多

曰固是氣不平亦是量狹人

量隨識長亦有人識高而量不長者

是識實未至也

是識實未至也

高也

大凡別事人都有強得て唯識量強不可

今の人斗筭之量有金斛之量有鐘鼎之量有江河之量有

亦大矣然有涯有涯亦有時有而滿

惟天地之量則無滿無故小聖人者天地之量也聖人之量道也常人

高めて器量の長ざらぬまひけからく

大凡別

事人都強得唯識量不可強

就他の事に

廣き事られざる學問の見識

今人有斗筭

之量有金斛之量有鐘鼎之量有江

河之量江河之量亦大矣然有涯有

涯亦有時而滿

筭ハ二升なり金ハ六斗四升

石四斗なり又江河のこも有とらるる

是も涯の真の大なり又時と

惟天地之量則無滿故聖人者天地

之量有者天資也

之量也聖人之量道也常人之有量

者天資也

天地の間如聖人の器量なり

天資有量須有限

是はまげんの天資

大抵六尺之軀力量只如此雖欲不

滿不可得也

天資の量は時ハ廣大

如鄧艾三公小位

下蜀有功便動了

魏の鄧艾七十の年

好に至りてせまりとらるる三公ハ左右内乃

人多言古時直
用嫌を避得
後世此を用ひ得
不_レ自_レ是_レ人
無_レ豈_レ是_レ時無_レや

君實嘗先生に問
て云一人を給事
中_レ除_レんと欲誰
う_レ可_レ者_レ先生の
曰_レ初_レ論_レ人_レ才_レと論
は却_レ可_レ今_レ既_レ小
此_レの如_レ願_レ其人
有_レと雖_レも何_レで
言_レ可_レ

磨_レ心_レしつ_レつ_レの_レなり理_レの_レなり
人多_レ言_レ古_レ時_レ用_レ直_レ不_レ避_レ嫌_レ得_レ後_レ世_レ用_レ
此_レ不_レ得_レ自_レ是_レ無_レ人_レ豈_レ是_レ無_レ時_レ
直_レ道_レ小_レお_レこ_レう_レひ_レ嫌_レ避_レる_レは_レ後_レ世_レに
人情_レう_レく_レく_レう_レく_レい_レ多_レ是_レ人_レの_レち_レと_レ時_レ節_レ有_レる_レ

○君實嘗問先生云欲除一人給
事中誰可為者先生曰初論人
却可今既如此願雖有其人何可言

君實ハ司馬温公あり程先生に_レつ_レや_レ給_レ事_レ中_レ
の_レ官_レホ_レ一_レ人_レを_レ除_レた_レく_レ誰_レに_レ可_レら_レん_レか_レ程_レ先_レ生_レ
の_レ答_レに_レ是_レ下_レ論_レく_レ人_レを_レ多_レく_レい_レべ_レい_レ余_レ小_レし_レい_レ
ゆ_レう_レく_レは_レた_レく_レ人_レ有_レる_レも_レ言_レす_レ可_レら_レん_レか_レ

君實曰公_レ口_レ於_レ
出_レて_レ光_レが_レ耳_レ於_レ又_レ
何_レと_レ害_レや_レん_レ先_レ生_レ
終_レ小_レ言_レ不_レ

先生の云韓持國
義小服はる最得
可不

一日願持國范夷
叟與舟と穎昌の
西湖

須史客將云
一官員有上書し
て大資の謁見を

君實曰出於公口入於光

耳又何害先生終不言

○先生云韓持國服義最不

可得

一日願與持國范夷叟泛舟

于穎昌西湖

須史客將云有一官員上

書謁見大資

願將為甚の急切
の公事有と乃ら
是已を知と求
ひる願の云大資
位居て却て人を
求不乃ち人とし
て倒ふ来て已れと
求使是甚の道理

夷叟の云只正叔
太執はるが為
ちり求薦章常
事也

願の云然不只曾
求不者ハ其不
来求む者ハ
之に映る有
為に遂小人と致
此の如し持國
便申服

先生因て言今日
職を供はる只第
一件便申他底と
做得不吏人轉運
司に申状と押
まはる願曾簽不
國子監自係臺
省に係臺省朝
廷の官に係外司吏

小謂見一奉らんと申ひく大資と願將為有
ハ上位の貴人がをのりしり

甚急切公事乃求知已願云大資

居位却不求人乃使人倒來求已是

甚道理先生傍り思ふやハ甚で急カ
公用有てりや思ひに在らる

の役人己身分と推奉役付致度との願あり
依て先生兩人に向てのふやハ大資等ハ上位

ゆゆれべ天下の貴人をさき求むべきに左
ハかきして却て人のかより身分と賣や

道理と申はる甚夷叟云只為正叔太

執求薦章常事也夷叟答てハ行義止
角先生ハ行義止

固執ハさか故ハ左ハ思ひ侍れ長有るの
常の事ありとぞ求薦章ハ願ひの口上書なり

願云不然只為曾有不求者不與來

求者與之遂致人如此持國便服先生
生

の曰下のつ所決して然るべからん然れども世の
所義ありやにかり来りたる願ひ求めらるやの

さゆ有るの中を官をわつてばしてへつる求むる
のものにむらむる事ありぬとぞ韓氏はと聞て

先生因言今日供職只第一件

便做他底不得吏人押申轉運司狀

願不曾簽先生の曰今日時ハ官職と供はるに
一件条他底ハ勤不得事はれハ

願て吏人轉運使ハ願ひをさすふ運使
こげ状帖ハ押印をさす人簽名ナリハ先生ハ

此官とつとめぬ内未し國子監自係臺省
て此事ハさるりける也

有申狀と行合
豈臺省倒の外
司申之理有や

臺省係朝廷官外司有事合行申狀
豈有臺省倒申外司之理

先生此時西の京にて教授ありしに國子監の臺省にうらまへ臺省ハ朝廷の附たる官なりと云ふべし

只後前の人只利害
を計較して事体
と計較せざる為
直小怠地ちるこ
得り

只為從前人只計較利害
不計較事體直得怠地

後前の官人ハ利害を計較して朝廷の事体と計較せざるは自然に怠地なりと云ふべし

溘聖人名と正
えんと欲はる處と看
て道と見得ずし
名正不時便ちり
樂興不に至る是
自然に住得ず

須者聖人欲正名處見得道名不正
時便至禮樂不興是自然住不得

事の次第名目の正しき事欲のみといふ則ち心を付べし命吾も名目正しき後ハ刑罰はらさばあちりて人命も無質の死

學者世務の通
不あり可不天下の
事ハ譬ハ一家の如
我為非則
非がら則し為

學者不可不通世務天下事譬如一
家非我為則彼為非甲為則乙為

人遠慮無ハ必
近憂有思慮ハ
當小事の外ハ有

遠慮必有近憂思慮當在事外

聖人之人を責也
常に緩便なり只

聖人之責人也常緩便見只欲事正

遠慮

人無

遠慮

遠慮

遠慮

遠慮

遠慮

遠慮

遠慮

遠慮

遠慮

遠慮

遠慮

遠慮

遠慮

遠慮

無顯人過惡之意

聖人の人の身持を正し
ぬく人の人を責むるの
緩容するやえり人の過失
事と見ゆ

伊川先生云今之守令唯制民之產一

事不得為其他在法度中甚有可為

者患人不為耳

方今の州守縣令の民の產
業をむり

明道先生作縣凡坐

處皆書視民如傷四字常曰顯常愧

此四字

伊川每

事の正し
欲て人の過惡を顯
い之意無と見

伊川先生の云今
之守令唯民之
産と制ゆるの一度

為と得不得不其
他法度の中在
て甚為可者有人

の為不と患耳
明道先生縣と作
凡坐ゆる處皆

民と視と傷如
の四字を書常
曰顯常に此字と

愧

見人論前輩之短則曰汝輩且取他

長處

劉安禮云

王荆公執政議法改令言者攻

之甚力明道先生嘗被旨赴中堂議

事荆公方怒言者厲色待之先生徐

曰天下之事非一家私議願公平氣

以聽荆公為之媿屈

王荆公執政の官
時新法を改む
の令を出し外の役人の善惡を争攻られ
も中々荆公服はる心や推威と以て推付あり

伊川人前輩之短
論と見毎小則曰汝
の輩且他の長處
と取

劉安禮の云

王荆公政を執て
法を改令を
改む言者之と攻
る其力明道先
生嘗て旨を被中
堂小赴て事と議
荆公方に言者と
怒て色を厲す
之と待先生徐に
曰天下之事一家
の私議非願くは

公氣を平にして
以て聽荆公之為
小媿屈也

劉安禮民小臨
を問明道先生の
曰民として各其情
を輸して得使
吏を御して
と問曰已と正し
て以て物を格

横渠先生の曰凡
人上為則易下
為則難然易下
為則能亦未

下と使て能
其情偽と尺
也大抵人と使
て已嘗て之を
為則能人と使
坎維心亨故行
有尚有外積險
難心亨疑不則
往て功有也今水
万仞之山臨下
復疑滯之前在
無惟義理而已有

此時先生上の曰民として御吏の官なる由中堂
評議有らる中堂の政務の席あり然らる
荆公へ右權を以て怒らる時程先生いふ徐々
容色して先生小對する時程先生いふ徐々
小仰られらる是れ天で民預る大事に家の
私議より貴公も先平氣よりありて
聽分て此言小媿屈らるる
○劉安禮問臨

民明道先生曰使民各得輸其情問
御吏曰正已以格物
安禮の問臨位
小在て民と治む

先生いふ免より民の情と求輸する民の
官人と恐るるりて得いふ又下吏と御の
法をこひる先生の答小自己のふ諸事を正整
すべしとらるれば其他の物事何いふ思ふるる
○横渠先生曰凡人為上則

易為下則難然不能為下亦未能使

下不盡其情偽也大抵使人常在其

前已嘗為之則能使人

坎維心亨故行有尚外雖積險苟

處之心亨才疑則雖難必濟而往有

功也今水臨萬仞之山要下即下無

復疑滯之在前惟知有義理而已則

復疑滯之在前惟知有義理而已則

復何田避所以心通

人己之行能所
所以者其難所
者小於己則情
其俗之異者身
雖而益縮惟心
則人之非笑
所義理耳天下
を視ふ能其道
後之莫然
之未為怪正
未必中然

復何田避所以心通

於其所難者則情其異俗者雖易而
羞縮惟心弘則不顧人之非笑所趨
義理耳視天下莫能移其道然為之
人亦未必怪正以在己者義理不勝

以在己者義理不勝

情與羞縮之
病消則有長
病常在意
思齷
事之作由無

在古氣節之士
冒死以為
有義於未
必中然

病消則有長不消則病常在意
齷齪無由作事
情與羞縮之

在古氣節之士冒死以為
於義未必中然非有志槩者莫能况

志察有者非人能能之無
况下五義理已
明於心於何為
不為不

姤之初六羸豕
孚趾蹢躅豕
豕羸時小方
於未動也無
然至誠蹢躅
於在伸也
則伸矣

李德裕處置
處置如徒
其帖息威伏
知而志

人小童を教
亦益を可
已を絆て出入せ
不の一の益也
人の授るて數
るの已も亦此
義を了ん二つの
益也之に對して
必が衣冠を正
く瞻視を尊
す三の益也常に

吾於義理已明何為不為

○姤初六羸豕孚
於蹢躅得伸則伸矣

如李德裕處置閣官徒
知其帖息威伏而忽於志不忘違契

察少不至則失其幾也

此文義二益也對之必正衣冠尊瞻
視三益也常以因已而壞人之才為
憂則不敢隨四益也

以て已小因而人
之才を壊と憂
と為則に敢て墮
不四の益也

益の有数々有るに右孟子のこのまは
益といふは益なり又人を教りて授くるは
我も文義了るるを又門人に對して衣冠
瞻視をつくらぬ又已身持の
と壊傷るるは又已身持の
と墮るるは此四品の益なり

近思錄餘師卷之十終

近思錄餘師卷之十一

教學類凡二十一條

心を教へ學ハハハ
りてこのぶらあり

濂溪先生曰剛善為義為直為斷為
嚴毅為幹固惡為猛為隘為強梁

人よ得手不得手の氣剛陽氣の勝
生付の人善分の所が義と好しと正直と事の
決断と嚴重と心志の堅固と
悪る分は猛と強梁と

柔善為慈為順為巽惡為懦弱為無

斷為邪佞

教學の類凡て
二十一條
濂溪先生の曰
剛善と義と為
直と為断と為
嚴毅と為幹固
と為惡と猛と
為隘と為強梁
と為
柔善と慈と為
順と為巽と為
惡と懦弱と為
無断と為邪佞
と為

惟中也者和也
節中也天下之
達道也聖人之
事也

故聖人教也
惡之易自其中
至俾而止矣

伊川先生の曰く
古人子と生る能
食能言而之
に教の

大學之法豫
之幼也知思未
主とする所有は

伊川先生の曰く
古人子と生る能
食能言而之
に教の

惟中也者和也中節也天下之達道也聖人之事也

伊川先生の曰く
古人子と生る能
食能言而之
に教の

大學之法豫
之幼也知思未
主とする所有は

伊川先生の曰く
古人子と生る能
食能言而之
に教の

便當以格言至
論を以日小前於

陳すべし
未曉知すし雖も

且當に薰聒して
耳小盈腹小充使

有言を以て之を
他言を以て之を

不也
若之を為し豫

及で私意偏好
於生一衆口弁言

外欲其純完不可得也

知思未有所主便當以格言至論日

陳於前
豫して之を以て

且當薰聒使盈耳充腹久自安習若

固有之雖以他言惑之不能入也

若為之不豫及乎稍

長私意偏好生於内衆口辨言鏢於

外欲其純完不可得也

胡安定湖州小在
 者治道者明小
 於中講治民兵
 水利算數之類
 嘗言劉蕡
 善水利
 小政之為皆水利
 興之功有
 凡言立
 思之涵蓄
 德無者
 使不
 人之教

有欲明治道者講之於中如漢治兵
 水利算數之類嘗言劉蕡善治水利
 後累為政皆興水利有功
 董意思不使知德者厭無德者惑
 教人未見意趣
 必不樂學欲且教之歌舞
 童子之教方
 別義

趣と見
 學と樂不且
 之歌舞と教
 古詩三百篇の如皆
 古人之作り関雎
 之類の如家と正
 之始なり故小之
 郷人小用之を邦國
 に用日小令とて之
 と聞使
 此等の詩其言
 簡奥かて今の人
 未曉易かて別
 小詩と作て畧童
 子小教洒掃應對

堅固なる意趣もつらぬい学ハ不
 思ふとこれハ歌ハ又ハ舞ヲヤ祭府
 詩三百篇皆古人作之如関雎之類
 正家之始故用之郷人用之邦國日
 使人聞之
 此等詩其言簡奥今人未易曉欲
 別作詩略言教童子洒掃應對事長
 之節令朝夕歌之似當有助
 心簡奥して今人の世の人曉りて依て別小詩と作
 り童子の行義作法と述べて朝夕に歌ふべし
 学問の心得以下ハ前ノ注と
 子厚以

長事之節言
て朝之之と歌令
欲當小助有
子厚礼と以學者
み教最善學者
とて據守所有
使

學者の語に見
未到の所之理と
以て之れ惟聞所深
徹不のたゆみ
反て理と將て低
看

舞射便人の誠
見古之人と教

之とて已と成使
是非といつて莫
洒掃應對の上
自便聖人の
事に到り

幼子ハ常小視
証無し自
上便是教ハ聖
人の事と以す
先傳後倦と
君子の人と教と
序有先傳ハ小
者近者といし
て而後教ハ大者
者遠者といし
是先傳ハ小と

段々ハ聖人の場所の合語
到るに此事ハ知れ

自幼子常視

無証以上便是教以聖人事

先傳

後倦

君子教人有

序先傳以

小者近者而

後教以大者

遠者非是先傳

以近小

而後不教以

遠大也

禮教學者最善使學者先有所據守

子厚ハ横渠子の弟子ハ人の教方最で善
子細ハ礼義と一番とせ故行義作法の據守有

語學者以所見未到之理不惟

所聞不深徹反將理低看了

舞射便見人誠古

之教人莫非使之成已自洒掃應對

上便可到聖人事

自幼子常視

無証以上便是教以聖人事

先傳

後倦

君子教人有

序先傳以

小者近者而

後教以大者

遠者非是先傳

以近小

而後不教以

伊川先生曰說書必非古意轉

手合そのの位く辱へ悟安そのの先傳うとく
意味遠く事の大なるそのの後より教とありのふ

以て而後教に
遠大と以て不
非也

伊川先生の曰書
を説く必以古意

小非轉人をして
薄く使學者直

是心と潜慮と積
優游涵養と之

とて自得使今一
日の説尺に只是

薄く教得て僅の
時帷と下して講

誦と説が如くに
至して猶未必に

一も尺と説か

古者八歳して小
学に入十五の

大学小入其才の教
可者と擇んで之

と聚不肖者
之を農畝復

蓋士農業と易不
既入學入則農

と治不然して後
士農判

學に在之養士大夫
之子の若則ち養

無くとも慮不度
人之子と雖既

學に入則亦必に
養有古之士十五

欲ちりて善道
入て学問の徳も成就せし

學校に在るの養の定式士大夫の禄有り故は之の
慮計かりて庶人の子養を宛施さずして十五

ボ

學に入則亦必に

養有古之士十五

欲ちりて善道

入て学問の徳も成就せし

學校に在るの養の定式士大夫の禄有り故は之の
慮計かりて庶人の子養を宛施さずして十五

ボ

使人薄學者須是潜心積慮優游涵
養使之自得今日說盡只是教得
薄至如漢時說下帷講誦猶未必說
書只今時の講釋といふ字々句無く解方と致す
故工夫考按といふもさうして輕薄かりし心と
潜て慮を積りて自得す一優游とはゆるや
りあり涵養といふ心を染ひては漢時代といふ仲
舒先生は一々書を説尺さるる
○古者八歳
入小學十五入大學擇其才可教者
聚之不肖者復之農畝蓋士農不易
業既入學則不治農然後士農判し

古者八歳して小
学に入十五の
大学小入其才の教
可者と擇んで之
と聚不肖者
之を農畝復
蓋士農業と易不
既入學入則農
と治不然して後
士農判
學に在之養士大夫
之子の若則ち養
無くとも慮不度
人之子と雖既
學に入則亦必に
養有古之士十五
欲ちりて善道
入て学問の徳も成就せし
學校に在るの養の定式士大夫の禄有り故は之の
慮計かりて庶人の子養を宛施さずして十五
ボ

自學以入四十至至
方仕仕中間自自自
三十五年の學有有又
利の赴可無則則
志所知可須去去
便善善走走便便
此自德成成

後之人童稚間間
自已小汲汲意意
利趨趨之之意意有
何由由善善小小向
得故故古古人人
使然後志定只只衣
食營營衣衣却却
害無惟利利祿祿之

後之人自童稚間已有汲汲趨利
之意何由得向善故古人必使四十
而仕然後志定只營衣食却無害惟
利祿之誘最害人後世より金銀利欲の事

只為道不明於天下故不得有所成
就且古者興於詩立於禮成於樂如
今人怎生會得古人於詩如今人歌

誘いく最最人人とと害
天下多少の有
只道天下於明意意
不為為故故成成就
得不目古古者者詩於於
興礼於立樂於成
今の人の知意意のの
生で會得得古古
人の詩は於今今のの
人の歌曲の如一般
同巷の童稚と雖
皆其說習習而而
其義と曉故故詩詩
於興起後後世世老
師宿儒尚尚其其美

曲一般雖閭巷童稚皆習聞其說而
曉其義故能興起於詩後世老師宿
儒尚不能曉其義怎生責得學者是
不得興於詩也今日も天下の廣く中に
不明故事不就詩經の詩も歌曲も童子聞習く
童子へ責ゆる詩礼樂興立し古禮既
廢人倫不明以至治家皆無法度是
不得立於禮也古人有歌詠以養其

曉之能不忘の
生て學者と責
得是詩於興と
もを得不得也

古礼既に廢
人倫明不以て家
を治に至る皆
法度無是禮於
立てて得不得也
人歌詠以て其性
情を養聲音以て
其耳目を養以舞
蹈以て其血脉を養
有今比之無是
樂於成てを得不得
也古之材を成て

性情聲音以養其耳目舞蹈以養其
血脉今皆無之是不得成於樂也古
之成材也易今之成材也難

今の世の
古の世の
人の倫理も不明して法度もなしは礼義
の立つるなり古人の詩経を詠歌して舞蹈して性
情と立てて依て古の人此材知の取立するは致し
易く今人の世は

孔子教人不憤不啓不
悱不發蓋不待憤悱而發則知之不
固待憤悱而後發則沛然矣

孔子の教
の法有る人か工夫とて工夫の七つ八つ小
して今九十の所より

也易今之材を成
て也難

孔子の人と教あり
憤不啓不悱不
發不蓋憤悱不
不而発は則之と
知て固不憤悱と
待て而後発は
則沛然矣

學者須く是深之
を思へ之と思て
得不然して後他の
為よ説便ち好初
學者の者須く是且
他の為よ説べし
然不獨他の曉

是深思之思之不得然後為他說便
好初學者須是且為他說不然非獨
他不曉亦止人好問之心也

第一は是は依て深く思慮せしめて後なるは
示はるは初學者の者は他のもの量程は申
聞はるは不然は向の心止

○横渠先生曰
恭敬撝節退讓以明禮仁之至也愛
道之極也已不勉明則人無從倡道
無從弘教無從成矣

不の...非亦人同
と好之心と止也

横渠先生の曰恭
敬めて節と擲ま
退讓して以て礼

也愛道之極也巳
勉明不則人從て
倡て無道從て

成て無矣
學記曰進而其安
なるを顧不入とて

其誠と由不使人
と教ると其材と
尽不と人未と之と

安子又之と進め
未之と喻らば
又之と告は徒小人

とて此節目と生
せ使
材と尺亦安と顧

不誠と由不皆
是施と之妄也
人と教の至て難

必人之人材と尺と
は乃人にと誤不及
可也と觀て然とて

後之と告聖人之
明は直小庖丁之牛
と解皆其隙と知

刃餘地と投て全
聖典余市

敬へつゝ程は擲ま
ひくふよもつと
是と礼義明に仁愛の道

の是を明白と勉む
るや又教の道も弘まり
○學記曰進而不顧其安使人不由

其誠教人不盡其材人未安之又進
之未喻之又告之徒使人生此節目

安の合点して落着く
にやの目の生じて屑
語あり教がうさ時

も誠とさす教を受
んすさすかゝ然る
よ又告諭とも屑

不盡材不顧安不由誠皆是施之妄
也 右の...の持前のオ知と尺

教人至難必盡人之材乃不誤人觀
可及處然後告之聖人之明直若庖

丁之解牛皆知其隙刃投餘地無全
牛矣 人のオ知と取立て可及所

を...庖丁とて人牛の解
るや又教の道も弘まり
の是を明白と勉む

の牛にさして全完一體
人之才足以有為

の牛にさして全完一體
人之才足以有為

聖典余市

牛無若矣

人之才以て為て有
に足り但其誠於由
不之以て則其才
と不勉率而之
を為と曰若八則
豈誠と由と有哉

古之小兒便能長
者に敬事は

之與提携する則
両の手に長者之手
を奉之小兒とい
口と掩而對

蓋稍事と敬事は
便ち忠信不故
小兒と教つて且

安詳恭敬と先

孟子の曰人映小適
るに足不也政映に
間小足不也唯大人
能君の心之非と格

と為と惟君の
心の非朋游學
者之際于至を彼
議論異同して未

深較してと欲は
雖惟其心と整理
して之を正小歸使
豈小補をん哉

但以其不由於誠則不盡其才若曰

勉率而為之則豈有由誠哉 人の才知
ハ教がよ

勉率而為之則豈有由誠哉 勉率
無理

之小兒便能敬事長者 古
小兒の時
敬恭

與之提携則両手奉長

者之手問之掩口而對 提携
掩口

蓋稍不敬事便

不忠信故教小兒且先安詳恭敬 敬
恭

不知心之忠信 小兒
敬の教がら

○孟子曰人不足與適也政不足與

間也唯大人為能格君心之非非惟

君心至于朋游學者之際彼雖議論

異同未欲深較惟整理其心使歸之

正豈小補哉 國と治るの第一ハ君の心と格し
て非義我の心の無やうと

たつるを所要の大事 論義の
較合

近思錄餘節卷之十一終

近思錄卷之十二
警戒類凡三十三條
五言不所始
...

警戒の類凡三十三條

近思錄餘師卷之十二

警戒類凡三十三條

警戒二字とみまゝに人の心の私己のころと利欲の心をみまゝにみれば、故に君子いふ、めを説きあはる。

濂溪先生曰仲由喜聞過令名無窮

焉今人有過不喜人規如護疾而息

醫寧滅其身而無悟也噫

吾が過失を聞き、今時の人、喜悟なき、故に名を聞き、今時の人、喜悟なき、受て醫師の服業を思ひ、滅身が

濂溪先生の曰仲由過と聞て喜て令名窮無焉今の人過有

睽極則嗝戾而
合難剛極則躁
暴而詳不明極
則過察而疑多

睽之上九六三之正
應有其實孤不
而其才性此の
如自睽睽也

人親黨有之雖而
多自疑猜妄生
乖離を
黨之間小処雖
而常に孤獨也

解之六三曰負
且乘寇至致
負者各

傳曰小人而盛位
と竊じ勉正
事を為雖
而氣質卑下
本上小在之物非
終小吝者可也

經典餘師

近思錄卷之十二

四

道にうつりついで道といひてその末復とや
ふじゆりきりき善とてうらうらとわひひ
○睽極則嗝戾而難合剛極則躁
暴而不詳明極則過察而多疑

睽の卦に當りて身と高きなり人よ嗝戾て大よ
離の光明を兌の澤の中にうめれうづ
旁若無人かろろり躁はさるる

睽之上九有六三之正應實不孤
而其才性如此自睽孤也

人雖有親黨而多自疑猜妄生乖離
如

雖處骨肉親黨之間而常孤獨也

解之六三曰負且乘致寇
浪する

至貞吝

傳曰小人
吾を補らる寇人とまひ又盜

而竊盛位雖勉為正事而氣質卑下
本非在上之物終可吝也

小人盛位
位は盛時の
本上よ有可身ちぬゆは解吝たりゆ

經典餘師

近思錄卷之十二

四

若能大正則如何曰大正非陰柔所
 如何曰大正非陰柔所
 の能する所非也
 之能する所非也
 化して君子と為矣
 益之上九曰之
 益之上九曰之
 益して莫して之と
 敵手と或
 傳曰曰理天下之
 至公利者衆人の
 同欲する所苟
 其心を公にして其
 正理を失ふ則衆
 人亦欲與之
 復して無人も亦之
 と欲する

若能大正則如何曰大正非陰柔所
 能也若能之則是化為君子矣
 莫益之或擊之
 傳曰理者天下之至公利者
 衆人所同欲苟公其心不失其正理
 則與衆同利無侵於人人亦欲與之
 莫益之或擊之
 傳曰理者天下之至公利者
 衆人所同欲苟公其心不失其正理
 則與衆同利無侵於人人亦欲與之

若利を好於切
 て自利する於蔽
 れ自益を求て
 人於損する則人
 亦之を力爭故皆
 之を益して莫而之
 數を奪する者有矣
 艮之九三曰其限
 小其夤厲
 して心を薫
 傳曰夫止道宜
 を得て之を貴行止
 時を以て之を能
 而一於定其堅強此
 の如きは則世に處
 するに幸矣

若切於好利蔽於自利求自益
 以損於人則人亦與之力爭故莫皆
 益之而有擊奪之者矣
 其限列其夤厲薰心
 傳曰夫止道貴乎得宜行止
 不能以時而定於一其堅強如此則
 處世幸矣與物睽絕其危甚矣

睽絕其危其危甚矣

人之固一隅小止而世舉之宜

與者則艱寒忿畏其中艱寒忿畏其中

裕之理厲薰心謂不安之勢薰燥其

中也既良止之卦也

大率以說動安有不失正者大率以說動安

有尊卑之序夫婦倡隨之理有夫婦倡隨之理

有此常理也有此常理也

守其時之宜守其時之宜

人之固止一隅而舉世莫與人之固止一隅而舉世莫與

宜者則艱寒忿畏其中豈有安宜者則艱寒忿畏其中豈有安

裕之理厲薰心謂不安之勢薰燥其裕之理厲薰心謂不安之勢薰燥其

中也既良止之卦也

大率以說動安有不失正者大率以說動安

有尊卑之序夫婦倡隨之理此常理有尊卑之序夫婦倡隨之理此常理

男女男女

也若徇情肆欲唯說是動男牽欲而也若徇情肆欲唯說是動男牽欲而

失其剛婦狃說而忘其順則凶而無失其剛婦狃說而忘其順則凶而無

所利矣男子之尊女子之卑夫之倡妻之命

雖舜之聖且雖舜之聖且

畏巧言令色說之惑人易入而可懼畏巧言令色說之惑人易入而可懼

也如此色巧言令色說之惑人易入而可懼

治水土天下之大任也非其至公之治水土天下之大任也非其至公之

心能捨己從人盡天下之議則不能心能捨己從人盡天下之議則不能

成其功豈方命圮族者所能乎成其功豈方命圮族者所能乎

經典餘帛

近思錄卷之十一

五

水

徇欲之肆徇欲之肆
唯說小曼動男唯說小曼動男
欲小牽而其剛欲小牽而其剛
失一婦狃說小狃失一婦狃說小狃
而其順忘則凶而其順忘則凶
而利之所無矣而利之所無矣
舜之聖雖且巧舜之聖雖且巧
言令色說之惑人言令色說之惑人
易入而可懼易入而可懼
可也此之如可也此之如
水也其至公之心能水也其至公之心能
已也捨己從天下之已也捨己從天下之
議則不能議則不能
功也成豈不豈功也成豈不豈
命也方命圮族者命也方命圮族者

能之所及乎

鯀九年而功成弗

雖然也其治

所固他人之及所

非也惟其功叙

有故其自

任也其益強

嗚矣其類也

益甚公議

隔而人心離矣

其惡益顯而功卒

不可成也

君子之故以

直而微生高枉

所小者其難也

而害則大矣

人慾有則剛無剛

則慾於屈不

人之過也各其類

小於君子常

厚於失小人

常以薄於失君

天下之治其大任者水難入之命也

水德之積也君子之信實尺不時也

鯀九年而功成其所治固非他人所及也

惟其功叙有故其自任也其益強嗚矣其類也

益甚公議隔而人心離矣是其惡益顯而功卒不可成也

君子之故以直而微生高枉所小者其難也

而害則大矣人慾有則剛無剛則慾於屈不

人之過也各其類小於君子常厚於失小人

常以薄於失君子之愛於過小人之忍於傷

明道先生曰富貴驕人固不善學

明道先生曰富貴驕人固不善學

明道先生曰富貴驕人固不善學

明道先生曰富貴驕人固不善學

明道先生曰富貴驕人固不善學

明道先生曰富貴驕人固不善學

明道先生曰富貴驕人固不善學

明道先生曰富貴驕人固不善學

明道先生曰富貴驕人固不善學

明道先生曰富貴驕人固不善學

明道先生曰富貴驕人固不善學

明道先生曰富貴驕人固不善學

明道先生曰富貴驕人固不善學

害亦細也

人事と料と明と為便駁

人外物の身と奉者於事々好ら

んことを要はる自家一箇の身其心有却好らんことを要不

苟外面物の好を得時却て自家の身其心却て

已に先好不ことを知道不也

人天理に於て昏者其嗜欲他と亂るは為と

莊子之言其嗜欲深者其天機淺

此言其最長伊川先生の曰機を闕はるは之を

れば機心必生す蓋其闕時に於て心必ず喜既喜則種子と種下が如し

經典餘師

問驕人害亦不細

富貴なるものや病は人

人以料事為明便駁

人逆詐億不信去也

智を推料し人何意

吾氣よびるる不信し人於外

物奉身者事事要好只有自家一箇

身與心却不要好

外物衣服金銀道具

苟得外面物好時却不知

道自家身與心却已先不好了也

外面

物右金銀衣服道具類へ好善なるを願ふ吾此身と此心の好善なるを亡て不知道らん

人於天理昏者是只為嗜欲亂著

他

言其嗜欲深者其天機淺此言却最

是

伊川先生曰闕機事

之久機心必生蓋方其闕時心必喜

既喜則如種下種子

機ハけりい

經典餘師

八

疑病者未
事至時有
先疑之端
在

事之周羅者
先事之周
端有之在
也

事之大小
其弊尺之
直尋之病
小人小丈
夫不合他
本惡

○疑病者未
有事至時先有疑端在
心

○周羅事者先有周事之端
在

○較事大小其弊為枉尺直尋之病

○小人小丈夫不合小了他

本不是惡

○雖公天下事若用私意為

之便是私

○做官奪人志

○驕是氣盈吝

是氣歉人若吝時於財上亦不足於

事上亦不足凡百事皆不足必有歉

歉之色也

○驕奢之氣盈

天下公事
雖若私意
用之為便
是私
官與做人之志
奪
驕是氣盈
吝是氣歉
人若吝
時於財上
亦不足
凡百事
皆不足
必有
歉之
色也

○本不是惡
○雖公天下事若用私意為
之便是私
○做官奪人志
○驕是氣盈吝
是氣歉人若吝時於財上亦不足於
事上亦不足凡百事皆不足必有歉
歉之色也
○驕奢之氣盈

未道と知る者
醉人の如其醉時
所無其醒及て
也愧恥不とて

人之未字と知る
者ハ自視以て
て無と為既
学を知らて反
て前日の為所と
田心則駭て且懼矣

拾七の云一日三點
檢は明道先生
の曰哀可也哉其

○未知道者如醉人方其醉時無
所不至及其醒也莫不愧恥
人之未

知學者自視以為無缺及既知學反
思前日所為則駭且懼矣

○邢七云一日三點檢明道
先生曰可哀也哉其餘時理會甚事

蓋微三省之說錯了可見不曾用功

又多逐人面上說一般話明

道責之邢曰無可說明道曰無可說

便不得不說

○横渠先生曰學者捨禮

餘時甚事と理
會す蓋三省之
説は微錯了曾
て功を用不をも
見可
又多人の面上を逐
て一般の話を説
明道之と責邢
の曰説可無明道
の曰説可無をも
便説不をも得

横渠先生の曰学
者禮義を捨則
飽を食して日
を終歎焉所無

一の名ハ邢恕と此人の工夫は一日の内は三度
身の善悪を省
又多人の面上を逐て一般の話を説明
道責之邢曰無可說明道曰無可說
便不得不說
説をとりあひなす時ハ先生を責め
ト先生然らば此弊一ハ先生ハ口説
○横渠先生曰學者捨禮

下民與一故事
所食之良之間
燕遊之樂不踰
不

鄭衛之音非
音意思留連令又
怠惰之意生
從而驕淫之心
致
珍玩奇貨雖
其始人感
也亦是如
切不從而限
無嗜好生
故孔子曰必

之放也亦聖
人經歷過但
人不能物為
所不耳

孟子經に及て
言と特に郷原
之後ふ於ては
者先立不と心
初より作て無
を以て惟是左
小者て人情順
て違ふと欲不
一生此の如し

義則飽食終日無所猷為與下民一
致所事不踰衣食之間燕遊之樂爾

○鄭衛之音悲哀令人意思留連
又生怠惰之意從而致驕淫之心

雖珍玩奇貨其始感人
也亦不如是切從而生無限嗜好故

孔子曰必放之亦是聖人經歷過但
聖人能不為物所移耳

○孟子言及經特於郷原
之後者以郷原大者不先立心中初

無作惟是左右看順人情不欲違一
生如此

郷原の事論語に余師と出たり
人ほめられし君子と郷原とを以て
生が同真實の道と

是なり清正公のやうに有たりしなり

近思錄餘師卷之十二終

辨異端の類凡て十四條

明道先生の曰揚墨之害申韓於甚佛老之害揚墨於甚

揚氏我為仁於疑り墨氏兼愛り義小疑あり申韓則易見故孟子只揚墨

近思錄餘師卷之十三 辨異端類凡十四條

辨異端の類凡て十四條の道とわかれし異

明道先生曰揚墨之害甚於申韓佛老之害甚於揚墨

揚氏為我疑於仁墨氏兼愛疑於義申韓則淺陋易見故

近思錄餘師

近思錄卷之十三

十一

と謂ふ其世と惑
こゝ之甚きを為也

佛老其言理に
近し又揚墨之比
非此害と為し
尤も甚き所以に

揚墨之害ハ亦孟
子之と謂ふを經
て所以小廓如也

伊川先生の曰儒
者心と正道小潜
て差有容其
始甚微なり其終

不可救可不

師也過たり商也
及不ら如手聖人の
中道小於て師ハ
只是厚於過たり
只是及不ら此
之然厚則漸
及不則便我為に
及同く儒者於出
て其末遂小揚墨
小至り

孟子只闢揚墨為其惑世之甚也

の仁墨子の意の孟子余師に出たり申韓の
子の浅陋なればその非なること見へ易しと有り
て孟子の揚墨と破滅して
世の人の惑と有り

理又非揚墨之比此所以為害尤甚

佛法と老子仙人の学問へ人間の心の徳や好し
うれしうらやまやうやうやうの修羅凡悩り
苦と悟ると説示すの由は道理に近き揚
墨之害亦經孟子闢之所以廓如也

伊川先生曰儒者潜心正道不容

有差其始甚微其終則不可救

有と潜て中正道に面向するは
有たりと微し心たがへば終後ハ
直しぬとて救

如師也過商也不及於

聖人中道師只是過於厚些商只是

不及些然而厚則漸至於兼愛不及

則便至於為我其過不及同出於儒
者其末遂至揚墨
親墨子の兼愛し人の
親人の君人の臣下民百
姓も吾親も君も臣下百姓と甲ひる小兼ら
はゆる思ふは是中庸の道は過らぬ揚子の
吾身内も有り他人とべ外はあり中道に
不及なり子張の仕過かとも子夏の行不殆とい

揚墨が如く至るも亦未父と無し君を無び小至す孟子之と推して便此於至蓋其差必は長於至也

明道先生の曰道之外小物無物之外道無是天地之間適と而道非也無也父子即而父子親所に在君臣小即而君臣感小はる所は在以て夫婦と為長幼と為朋友と為至まて為所

つれも儒學より出て揚墨に入らざるも師へ子張高へ子夏なり

至如揚墨

亦未至於無父無君孟子推之便至於此蓋其差必至於是也

明道先生曰

道之外無物物之外無道是天地之間無適而非道也即父子而父子在所親即君臣而君臣在所嚴以至為夫婦為長幼為朋友無所為而非道此道所以不可須臾離也

而道非也無此道須臾離不可也

神辨人間の道は父子の道は夫婦長幼朋友の道は嚴敬第一なるべし

然則人倫と毀し四大と去者其道於

人倫去四大者其戾於道也遠矣

戾也遠矣

故人倫の道とや四の大事を去るは天地の道より戾奉るは四の水火風

也適も無也莫も無也義之與比若適

故君子之於天下也無適也無莫也

有莫有則道に於て間有し為天地之

義之與比若有適有莫則於道為有

全は非也

間非天地之全也

彼釈氏の學敬以

彼釋氏之學於敬以直内

則未之有也

則有之矣義以方外則未之有也

故以滯固者枯槁於入疏通者

佛法の道も敬慎戒法をもつて一身の内を正直に有く志りれども君臣の義夫婦の道との外に我よりて命を打ん故滯固者人於枯槁疏通者歸於恣肆此佛之教所以為也

吾道則然不性而巳斯理也聖人易於於備に之と言

也 滯固のこりかたすなりしむ枯槁はれ木は他のわづの心のすまはるる念佛にりするものへは身と世にるものれども又ちりたるものへは休のやうみ佛壇は豆をまき又魚くつてして外口はつらぬるぞ我すにの儒道りうるる益賤しき 吾道則不然率性而已斯理也 聖人於易備言之 聖人の道は人の性心の自然より出され

釈氏本死生と怖利の爲に豈是公道か

の時父子の縁と切らるる俗家も居やとちり夫婦はけがらやとて男女はんやの道と絶す 夫の易の書は備され言ののりなり ○釋氏本怖死生爲利豈是公道 法の立かへ生の世の所作して

惟上達と務而下學と無然則其の上達は處豈是有也元相連屬不但間斷有は道也

惟務上達 而無下學然則其上達處豈有是也 元不相連屬但有間斷非道也 上達はちの度へ下學へ君臣父子の道は右のふくやく父母妻子を捨るる志りれは忠孝の道とて言葉と行も連屬せば聖人の道は間絶たり

孟子の曰其心を
尺者其性を知
也彼所謂識心
見性是也心を存
性養一段
の若くは無矣

彼固小家と出く
獨善はと曰便ち
道体は於て自ら不

或人の曰釈氏地獄
之類皆是下根之
人の為に此と設て
怖と善と為令
先生の曰至誠天

地と貫くも人尚
化不ある有豈偽
教と立而人化可
く有乎

學者釈氏の説は
於て直に須く淫
声美色の如く
以て之と遠くべし
爾不へ則張々然
とく其中於入
矣

顔淵邦と為こと
向孔子既小之告
二帝三王之事

經典餘節

孟子曰盡其心者知其性也彼所謂
識心見性是也若存心養性一段則
無矣

曰出家獨善便於道體自不足
彼固

皆是為下根之人設此怖令為善先

生曰至誠貫天地人尚有不化豈有

立偽教而人可化乎

○學者於釋氏之

說直須如淫聲美色以遠之不爾則

駸駸然入於其中矣

顏淵問為邦孔子既

近思錄卷之十三

五

而以復戒也鄭
聲之放也倭人
遠之聲也倭人
鄭聲淫倭人
人始之彼倭人
者是他一邊之倭
耳然而已於則
危只是能人
移使故危也

禹之言於至曰何
巧言令色之畏
乎且直之畏言
此之消只是須
猶免不免也

我氏之學更以言
戒之消不常
以戒自家自信
到後便
亂得
物一體之謂所以
者皆此理有只那
裏從來之為
生之則一時小生
皆此理之完
人則能推物
不他物與有
道可不也

告之以二帝三王之事而復戒以放
鄭聲遠倭人曰鄭聲淫倭人始彼倭
人者是他一邊倭耳然而於已則危
只是能使人移故危也
邊之身也又鄭之音樂之聲之淫也
人之心也又鄭之效也以上顏淵之夫子之示
王禹王湯王文王此三聖人
至於禹之言
曰何畏乎巧言令色直消言畏只是
須著如此戒慎猶恐不免
禹王之言也
戒慎之謂也
釋氏

之學更不消言常戒到自家自信後
便不能亂得
○所以謂萬物一體
者皆有此理只為從那裏來
生生之謂易生則一
時生皆完此理人則能推物則氣昏
推不得不可道他物不與有也
事之四季入心之生死世之盛衰也
易也物也同斷也
人智也推也

人只自私自家 軀殼の上頭と將
て意を起すを
為故に道理と看
得て他底と
這身と故ち來て
都て万物の中に
在て一例と看
大小大快活
釈氏此を知不
以て他の身上に
て意思と起那の
身と奈何と
却て厭惡んて根

物ハ推量カ
他も物も此の理
私將自家軀殼上頭起意故看得道
理小了他底
物中一例看大小大快活
以不知此去他身上起意思奈何那
身不得故却厭惡要得去盡根塵為

塵と去尺と得
と要ハ心源定不
吾に故小枯木死灰
の如かるるを得
要ハ然る此理没
此理有るを要セ
ハ除是死也
釈氏其實は身
と愛して放得不
故小説し許多
り譬言ハ負販之蟲
の如已に載て起不
る猶自更に物と
取て身に在又石と
抱て河に投はる如
其重と以て愈沉

心源不定故要得如枯木死灰然没
此理要有此理除是死也
吾身の意思をりるるを六根の塵と去
吾身と無るもの
吾身と心ハ動物なれば決して此理を
其實是愛身放不得故說許多譬如
負販之蟲已載不起猶自更取物在
身又如抱石投河以其重愈沉終不
道放下石頭惟嫌重也
地獄と恐れ許多し説らるるたゞハ負販虫のご
とくハ虫ハ重き物と去るハ負しを好し押へ付ら

判と言便是乱説

故且迹の上は於て聖人と合ふ

と断定せんか若し不其言合處有

則吾道固已不有合不者有固

に取不所是如立定は却て省易

同神仙之説有諸曰白日に飛昇は説

之類の若は則無山林の間は居て形と保ち氣と鍊て以

と云が若は則之有

譬一釘火の如之

と風中に置則過易之と密室に置

則過難此理有也

又問揚子聖人仙

と師とせし言厥術異ハ也聖人能

此等の事と為や否曰此は是天地間

の一賊若造化之机

と竊の非ハ安能延年と延ん

是乱説

父と捨て家と出れ身は忠孝の跡形有べし

迹上断定不與聖人合其言有合處

則吾道固已有不合者固所不取

如是立定却省易

如取べしぬ説るべし道の立定を

僂之説有諸曰若説白日飛昇之類

則無若言居山林間保形鍊氣以延年益壽則有之

譬如一鑑

火置之風中則易過置之密室則難

過有此理也

又問揚子言聖人不師僂厥術

異也聖人能為此等事否曰此是天

地間一賊若非竊造化之机安能延

延年

聖人として肯く
為使ハ周孔之と為
矣

謝顯道佛說與
吾儒同處之歷
舉伊川先生
先生曰
地同處多
只是本領不是一
赤月に差却に

橫渠先生の曰釈
氏天性を妄意而
天用と範圍は
と知不反て六根之
微を以て天地が因
縁不明を以て能
不則天地日月と
証幻妄と為

其用と一身之小
之蔽其志虚空
と語り小と語流
道中を失はる
所以なり

年揚子の言に聖人は仙術と師にたがひは道の異かたは又聖人此等の能為かたは

使聖人肯為周孔為之矣肯強小聖人

謝顯道歷め定め周孔夫子が勝たることを為の思はるる

舉佛說與吾儒同處問伊川先生先生曰地同處雖多只是本領不是一齊差却謝氏の工夫は佛法を儒道に

知範圍天用反以六根之微因縁天地明不能盡則証天地日月為幻妄此事多き並べの及ぶて来本領の根源は是非の差却の事なり

橫渠先生曰釋氏妄意天性而不

範圍天用反以六根之微因縁天

地明不能盡則証天地日月為幻妄

蔽其用於一身之小溺其志於虚空

之大此所以語大語小流道失中蔽

其大於過也六合と塵芥其小於蔽也人世と夢幻と之と理を究と謂ハ可乎んや理を究と謂ハ可乎んや知之と性と尺以て謂ハ可乎んや之と知不て無と謂ハ可

大也塵芥六合其蔽於小也夢幻人世謂之窮理可乎不知窮理而謂之盡性可乎謂之無不知可乎 塵芥の六合の間の見ゆる小なりんや人道世界の夢幻塵芥の人の性情ととも塵芥六合謂天地為有窮也夢幻人世明不能究其所從也

大易に有無と云言不有無と云ハ諸子之陋也

右のごとく塵芥の世界の夢幻の浮世のや大易不言有無言有無諸子之陋也 易の形の有無といふは形に依りて形より以上は天の理の備りぬといふは心から又その行状は

浮圖の鬼と明小有識之死生と受て循環と謂遂に厭苦を免と知りと謂可乎

浮圖明鬼謂有識之死受生循環 遂厭苦求免可謂知鬼乎 浮圖ハ陀と鬼ハ屠又陰陽尺で陰氣土中に居る抑凡夫愚痴に至る一筋に向一心を仏とらん一文字を識有て死して消く又生とらん苦と受て六道にまゝ此度は厭苦を厭科とのがねんと

人生以妄見為
人不知謂可乎
天人一物輒一取
舍生以天知
謂可乎

孔孟所謂天彼
所謂道或者遊
魂變之為未之
輪迴之為未之
思也

以人生為妄見可謂

知人乎天人一物輒生取舍可謂知

天乎 故人之世有假之世有夢之世有

知幻妄之世有天道人道一物輒生取舍

孔孟所謂天彼所謂道或者指遊

魂為變為輪迴未之思也 吾方知天

義之所謂彼方之所謂道之事之所謂易

人死之所謂消散之所謂天德之所謂

夫故過去未來現在之所謂地獄極樂之所謂

大學當先知天德知天德則知聖人

知鬼神 天理之自然在天之德則知

今浮圖劇論要歸必謂死生流

轉非得道不免謂之悟道可乎 劇論

自其說熾傳中

國儒者未容窺聖學門墻已為引取

淪胥其間指為大道乃其俗達之天

下致善惡知愚男女臧獲人人著信

其說熾在中國傳

大學當先知天
德則知聖人知
鬼神則知

今浮圖劇論要歸必謂死生流轉非得道不免謂之悟道可乎 劇論

其俗之天下達
善惡知愚男
女臧獲人人信
著

英才間氣
生則耳目恬習

之事則長
世儒崇尚之言

師之使遂
驅被因

聖人脩不而
道學不而知可

謂
故未聖人之心

識不已必
迹不求不謂未

君子之志
已必其文
事不謂

此人倫察不
物明不所以治

忽也所以德
所以

聖言耳
社的以其偽

下字の以其弊
稽無古自諛

道之辭翕然
て並び興り

氏之門於出
五百

五年

五年

五年

五年

五年

五年

五年

五年

五年

五年

法法らん中国の儒者の門
堵とゆうひ向ふ前は法は論
大道ありし其の風俗天下に達
愚者も男女の臧獲するも人々
使英才間氣生則溺耳目恬習之

事長則師世儒崇尚之言遂冥然被
驅因謂聖人可不脩而至大道可不

學而知 英才なる間氣の生るる
目耳恬習て成長のもは人々

世儒衆を崇尚するも南無阿彌陀
て道々驅りたり南無阿彌陀の二

道を得安 聖人の大 故未識聖人心已謂不

必求其迹未見君子志已謂不必事

其文 右の故は心気
及不又六經の文 此人倫所以不察庶物所

以不明治所以忽德所以亂 行

君臣父子夫婦の倫も察明るす庶物同断る

異言滿耳上無禮以防其偽下無學

以稽其弊自古諛淫邪道之辭翕然

並興一出於佛氏之門者千五百年

異 聖人の仁義忠孝の辭とちがひく地獄

極樂因果報應とてふものなりを防ご

ひるの法もわゆるへ学者貴人も上り下り念

佐とらぬりやりに行て宋の代まで千五百年

五年

五年

五年

五年

五年

五年

五年

五年

五年

五年

五年

五年

自信獨立不懼
不精一而自信
信大一人過
之才以有非
何之其間
正立之其是
非之較得失
計哉

自信獨立不懼精一自信有大
過人之才何以正立其間與之較是
非計得失哉
地獄と懼ふる大勢の人からて
志を立ぬく心と動する過ると通用の人には
心を守りて正しく立ぬく心と動する過ると通用の人には
計を見くらぶるや異端の人を見下して
相手にやぬ
との義あり

近思錄餘師卷之十三終

近思錄餘師卷之十四

觀聖賢類凡二十六條

此段ハ諸先生の說と記して昔の聖賢の道と觀したり

明道先生曰堯舜更無優劣及至
湯武便別孟子言性之反之自古無
人如此說只孟子分別出來便知得
堯舜是生而知之湯武是學而能之

四聖人の事の前に出たり優劣の別
有とく堯舜二帝の性生るの聖人の湯王武王の二
帝と學び得て聖徳の反變
たるかり孟子の分別あり
文王之徳則似

觀聖賢の類凡
て二十六條

明道先生の曰堯と
舜更無優劣無
湯武に至り及便
ち別あり孟子之
と性のまじり之
と及びること言古
自人此の如く説
無只孟子分別出
來て便ち堯舜
ハ是生かた而之
知湯武ハ是學而之
と能ること知得す

文王之德則如堯舜禹之德則湯武也似之皆聖人

仲尼包不之所無顏子違不之愚也如之學之示後世也於自然之和氣有言不而化者也孟子則其材蓋亦時小然而已

仲尼天地也顏子和風慶雲也孟子泰山巖巖之氣象也其言觀皆之見可矣
仲尼無迹顏子微其跡著孔子之迹是明快人顏子之迹豈弟之迹孟子之迹雄弁之迹
曾子聖人之學傳其德後來測可不安其聖人

堯舜禹之德則似湯武要之皆是聖人
○仲尼元氣也顏子春生也孟子

并秋殺盡見
文王之堯舜之如禹湯王武王之如夫子之如天

不違如愚之學於後世有自然之和氣不言而化者也孟子則露其材蓋亦時然而已
和氣春のやうなる花咲めを出す如愚の取説

風慶雲也孟子泰山巖巖之氣象也觀其言皆可見之矣
和風春の風草木をばつた夫子の徳天地のごとく顔子の和風のごとく孟子の泰山のごとく何れもこの言葉にて氣象頭

仲尼無迹顏子微有跡孟子其跡著孔子儘是明快人顏子儘

豈弟孟子儘雄辨
夫子の徳大にして目に徴する跡形を顔子の

曾子傳聖人學其德後來不

可不安其聖人

經典餘師

近思錄卷之十四

二

正と得而斃れんと言ふ如き且く文字と理會するも休て只他の氣象と看極て好他の見所の處に大いせ被後人好言語有と雖只氣象卑せ被終小道と類不

可測安知其不至聖人如言吾得正而斃且休理會文字只看他氣象極好被他所見處大後人雖有好言語只被氣象卑終不類道

○傳經為難如聖人之後纔百年傳

之已差

聖人之學若非子思子則

幾乎息矣道何嘗息只是人不由之

道非亡也幽厲不由也

荀卿才高其過多揚雄才短其過少

荀子極偏駁只一句性

惡大本已失揚子雖少過然已自不

識性更說甚道

董仲舒曰其義

其功計不此董子諸子に度越す

漢儒毛萇董仲舒の如最も聖賢之意を得たり然道

見て甚分明不此下即揚雄に至る規模又窄狹矣

林希揚雄を謂く祿隱と為揚雄の後人只他の書と著と見が為に便

正其義不謀其利明其道不計其功

此董子所以度越諸子士たるもの身行ハ義の不義

正すの外身小利功と君子ハ君子ハ漢儒

如毛萇董仲舒最得聖賢之意然見

道不甚分明下此即至揚雄規模又

窄狹矣毛萇の詩経の注と名高し仲舒ハ漢の大儒にして聖賢の意旨を得たる人と

規模ハ学問の作法と二人ハ程先生の目

林希謂揚雄為祿隱揚雄

後人只為見他著書便須要做他是

怎生做得是

器量有るが官祿を取く何れを為ざるを祿取の隱居ありと王

孔明有王佐之心道則未盡王者

如天地之無私心焉行一不義而得

天下不為孔明必求有成而取劉璋

聖人寧無成耳此不可為也王たるの徳と佐たる

王佐の才と諸葛孔明ハ王佐たるもの道と全

くハ尺さるる天地の道ハ私ハある一つに不義有

てハ聖人の惡む所なり蜀の劉璋ハ皇叔の同宗なり

論るる三国志ハ有世の人若劉表子琮將為

劉表子琮將に曹

公が為に并所する

若劉表子琮將為

能たれり

孔明王佐之心有道ハ則未盡王者ハ天地之私心無が如焉一の不義を行而天下を得為不孔明ハ必成し有と求而劉璋と取ひ聖人寧成し無耳此為不可也

劉表子琮將に曹

公が為に并所する

若劉表子琮將為

能たれり

興一可也

諸葛武侯の儒者の
の氣象有
孔明の礼樂一
庶幾一

文中子の本は一隱
君子世人往々其議
論と得附會して
書と成其間極て
格言有荀揚が道
到不處

韓愈亦近世豪
傑之士なり原道の
中の如言語病有と
雖然も孟子自而
後能許大の見識
を將て尋求者
才に此人と見

断て孟子の醇乎と
て醇と曰り又荀
與揚と擇焉而精り
ら不語焉而詳不
曰知と至てハ若
是他見得と不ハ豈
千餘年の後便能
断得此の如ク分

曹公所并取而興劉氏可也

曹操荆
州の劉

表が子劉琰が國とらんんと皇叔同宗たるをりて
是を守り孔明のすめりて皇叔にゆぐりと受りて
度々申けり志くんと皇叔再三辞退す後巴とと
不得し是と取く實に寛仁ゆて利をいりての君
と

庶幾禮樂

諸先生の評に曰孔明の正大に
儒者の氣象有と有り又評のひじ

の聖代のぞくに礼樂を引興さんとなり古昔の正風俗
とかりべきに庶幾一とものをとひりかゆる

○文中子本は一隱君子世人往々

得其議論附會成書其間極有格言

荀揚道不到處

文中子の隨の代の君子の隱居
と仕祿と好む往々とい

韓愈亦近世豪傑之士如原道中言語雖有病然自
後能許大の見識を將て尋求者才に此人と見

孟子而後能將許大見識尋求者才
見此人

愈の唐の韓退之先生なり大儒と近來
の一人の豪傑と衆人にすべりたるなり

原道の先生のやうに文なり病とい申合有許大
はとるり孟子より後の人にて先此一人とい

至如斷曰孟氏醇乎醇又曰荀與

揚擇焉而不精語焉而不詳若不是

他見得豈千餘年後便能斷得如此

明やらんや

学の本は徳と脩む
徳有然して後言
有退之却て倒に
学了文と学し因て
曰て未至ざる所を
求て遂ふ得所有
軻之死して其傳と
得ると曰く如此似
の言語は是前人と
踏襲するに非い又
鑿空して撰得出
に非い必い見所
有若見所無傳
所者何事と云

分明

醇酒の味旨く孟子の語の意味深と
荀子揚子の二人の擇むる精く
詳明なる實に能く見得とす
一千九百年も

○學本是脩徳有徳然後有言退之

却倒學了因學文日求所未至遂有

所得如曰軻之死不得其傳似此言

語非是踏襲前人又非鑿空撰得出

必有所見若無所見不知言所傳者

何事

是韓子の評と贊たる
道義と心の學び得て積ると徳と
退之先生ハ倒て文章のかり
徳の字ハ心得
名言有

ことを知す

周茂叔胸中灑落
光風霽月
の如し其政と為こ
中精密嚴恕に
務て道理を
盡に

伊川先生明道先生
の行状を撰て曰
先生資稟既に異
小而克美良道有純
粹か
如く温潤か
精金の

て徳を成し
孔孟の旨と得ると是又程先生の退之と評したる
踏襲と前賢の道と歩つたへ
古昔の聖人達の段々の徳

○周茂叔胸中灑落如光風霽月其

為政精密嚴恕務盡道理

茂叔先生の
宋朝の道

学の本原の人
夫より程子朱子と傳り
灑落や
旭日にや風に動きて草木の光有るを
清密はく

嚴ハ正
以上先生の
評語

○伊川先生撰明道先生行状曰先

生資稟既に異而文養有道純粹如精

良玉の如寛か而制
有和に而流不忠
誠金石於貫孝悌
神明於通其色
を視其物也
也春陽之温
如其言と聽
其人入也時雨之
胸懐洞
然く徹視同無
其蘊と測則浩乎
倉溟之際無
君

金温潤如良玉寛而有制和而不流
忠誠貫於金石孝悌通於神明視其
色其接物也如春陽之温聽其言其
入人也如時雨之潤胸懐洞然徹視
無間測其蘊則浩乎若滄溟之無際
行状の身行守節の状件を述るるたゞ一資稟
生れ付しつゝ充養ハ徳をやゝるる充て
けり凡人と異なり純粋ハ
けり凡人と異なり純粋ハ
良玉の如く不流の留りてちけり忠誠の心
金石の堅きを貫通し孝悌の心を神明の
よらんつゝ春の日の温和かりて人心好り

其徳と極小美言を
蓋以形容するに足
不先生已と行ふ内
敬於主と而之を行
ふに恕と以す善
と見て已諸出が
若欲不人於
施不廣居に居而
大道と行の言物
有而行常有

先生の字と為十五
六の時自汝南の周
茂叔道と論はるこ
とを聞て遂に科

言蓋不足以形容先生行已内主於
敬而行之以恕見善若出諸已不欲
弗施於人居廣居而行大道言有物
而行有常
容のいん尽すと人及が人の善事を
巳事のやうに思ふ吾不欲といふ人
施不やうに思ふ廣居ハ仁の場所なり大道
ハ仁を施すといふ物の言葉の信實
先生爲

奉之業之厭之慨然求道之志有之

未其要之知諸家於泛濫者幾釋於出入者幾十年返求六經於求而後之

命於至必孝廢物之明人倫於察性之盡

學自十五六時聞汝南周茂叔論道遂厭科舉之業慨然有求道之志

未知其要泛濫於諸家出入於老釋者幾十年返求諸六經而後得之

明於庶物察於人倫知盡性至命

必本於孝悌窮神知化由通於禮樂

代未明之惑秦漢而下未有臻斯理也

謂孟子沒而聖學不傳以興起斯文為已任

其言曰道之不明

異端害之也昔之害近而易知今之

神知化由通於禮樂

異端是之似之非

子沒而聖學傳不

其言曰道之不明

知易一今之害也
深而弁難一昔之
人と惑也其迷暗
に乗れ今之人は
也其高明に因

自之と神と究化と
知と謂と而して以
て物と用務と成
足不言為周遍を
ら不とのやと無實
ハ則倫理於外より

之學淺陋固滯
非んば則ち必此
於入る

害深而難辨昔之惑人也乘其迷暗
今之入人也因其高明

化而不足以開物成務言為無不周
遍實則外於倫理

則必入於此

窮深極微而不可以
入堯舜之道天下之學非淺陋固滯

之說競起塗生民之耳目溺天下於
汗濁雖高才明知膠於見聞醉生夢

死不自覺也

是皆

正路之秦蕪聖門之蔽塞關之而後

道義の明らかりたるものもその時よせり

經典餘論

近思錄卷之十四

七

道之明也不自也
邪誕效異之說競
起て生民之耳目
塗天下於汗濁
邪高才明知膠
雖見聞於膠醉
生夢死て自覺
不也

是皆正路之秦蕪
聖門之蔽塞之
關而後以
道に入可

之學淺陋固滯
非んば則ち必此
於入る

右の異端流の者のつと深く
微妙なる説も有がてつとれど
も逆も聖人の道に入るべし
陋らば一固滯ハるる異端
の學者とら此

自道之不明也邪誕效異
之說競起塗生民之耳目溺天下於

汗濁雖高才明知膠於見聞醉生夢
死不自覺也

邪誕人と欺ひ詞と妖異
ハ生て居ても酔つれ夢らるるに死のたて
く高明たるが知らるるものもその時よせり

是皆正路之秦蕪聖門之蔽塞關之而後
道義の明らかりたるものもその時よせり

先生進ハ將小斯人ノ道ヲ退シ以テ明クハ將小之と書に明クにせんハ不幸ニ及ス也其精微ト弁析シ者ハ稍世ニ於見ル者ハ學者ノ傳所耳

先生之門ニ學者多矣先生之言平易ト知易賢愚皆其益ト獲ル河於群飲

可以入道

右異端の諸子有て聖人の正路は、秦燕のくくたげりし如

先生進將覺斯人

退將明之書不幸早世皆未及也其

辨析精微稍見於世者學者之所傳

耳

弁析ハ分明ト云フ也其精微ハ妙カラシク論説チテ先生ノ道ト明ラシク書ニ

先生之門學者多矣先生之言平易

易知賢愚皆獲其益如群飲於河各

充其量先生教人自致知至於知止

誠意至於平天下洒掃應對至於窮

理盡性循循有序

先生の教方ハ洒掃テ掃除等ノ小學校ノ勤

病世之學者捨近而趨遠處下

而闕高所以輕自大而卒無得也

先生接物

辨而不間感而能通教人而人易從

怒人而人不怨賢愚善惡咸得其心

各其量ニ充テ如ク先生人ノ教ヲ致シ知自レ知止ニ於テ至ニ誠意ト天下ニ平ニ洒掃應對ニ窮ニ理ニ盡ニ性ニ於テ至ニ序有

世之學者近ニ捨テ而遠ニ趨キ下ニ處ニ而高ニ闕キ輕ク自大ニ而卒ニ無ク所以ト病也

先生の物に接する弁
而回不感而能通
人と教而人從易
人と怒而人怨不
賢愚善惡感其
心と得たり

狡偽者其誠
と獻暴慢者
者も其恭
心酔小人趨向之異
と以利害於顧
て時に排斥せ見
と雖退而其私

万物万事に接して明か小弁ト分て回つた所なく人よ
わゆる所人とも感通して人從服一咎ひべきに
怒りあふ人うらむ善悪小 狡偽者獻其
が事人の心にもひ得たり

誠暴慢者致其恭聞風者誠服觀德

者心酔雖小人以趨向之異顧於利

害時見排斥退而省其私未有不以

先生為君子也 先生は人として服し人として
徳を化すること致し狡偽者

さがる人として狡偽者先生へ誠と獻し暴慢
をいし先生の風義と聞し先生は恭敬
その徳とさるる心酔して小人不届き先生
に咎めし退付らるる又罪せらるるの
私に咎めし退付らるる先生と君子長者の

先生為政治惡以寬處煩而裕

稱美す
とるり
国の政務と執ていり事繁煩冗中の中に有るも
寛裕あり人の罪惡と治して此中和あり

當法令繁密之際未嘗從眾為應支

逃責之事 變ハ支ニ密ハ一ハその法の文
字の旨趣にたり合して責を逃するは人
先生はゆるぎなくその中和にあり

皆病於拘礙而先生處之綽然眾憂

以為甚難而先生為之沛然雖當倉

卒不動聲色 拘ハ礙ハ倉卒に事ありて
他の官人ハ倉卒に事ありて増
明らぬるを先生は沛然と増明らるる沛然

倉卒に事ありて増明らるる沛然
顔色聲音も

省て未だ先生と以
て君子と為不々
有れ也
先生の政と為惡と
治るに寬と以て
煩に處而裕
法令繁密之際
當て未嘗從眾に
從て文に應支責を
逃す之事と為
人皆拘礙於病も
而先生之に處
綽然と眾
憂て以甚難と為
而先生之と為

沛然たり倉卒に
當り雖声色を
動不

監司競て嚴急を
為之時に方其先
生と待てし率皆
厚有り設施之際
頼所有焉

先生為所細條法
度人效而為可也
至て其之と道而
從ひ之と動而和
物と求不而物應
未信と施不而民

信ずる小至て則
人及可不也

明道先生の曰く周
茂叔窓前草除
去不之と問云自
家の意思と一般

張子厚皇子と生と
聞てハ喜と甚
餓芋の者と見て
ハ食便ハ美不

伯淳嘗て子厚與
興國寺に在て講
論終日而曰知不
舊日曾て甚人有

經典餘用

近思錄卷之十四

方監司競為嚴急之時其待先
生率皆寬厚設施之際有所頼焉

先生所為細條法度人可效而為也
至其道之而從動之而和不求物而
物應未施信而民信則人不可及也

明道先生曰周茂叔窓前草不除
去問之云與自家意思一般

張子厚聞生皇子喜甚見餓芋者
食便不美

伯淳嘗與子厚在興國
寺講論終日而曰不知舊日曾有甚
人於此處講此事

謝顯道云明道

伯淳嘗て子厚與興國寺に在て講論終日而曰知不舊日曾て甚人有

近思錄卷之十四

十一

此處よ於て此事を講
せしむ

謝頭道の云く明道
先生坐ひるこ泥塑
人の如人は接る則
渾是一團の和氣

侯師聖の云朱公
於明道汝于見
歸て人は謂て曰
庭春風の中に在
て坐るは一箇
月

游揚初て伊川
見也伊川瞑目而
坐す二子侍立

既に覺て顧て謂て
曰賢輩尚此小在
半日既に晩且休
矣門と出ると及
門外之雪深一尺

劉安禮云く明道先
生德性充完に
粹和之氣面背於
於樂易の
益り樂易の
多く終日怡悦立之
先生に從て三十
年未嘗て其忿房
之容と見ず

先生坐如泥塑人接人則渾是一團

和氣 泥塑人土中作る人形なり一團ハ一
丸めまじりつくりし長閑なる自の和氣ハ

○侯師聖云朱公於見明道
春の日の長閑な庭とて一箇月住居の時を朱公於の先
坐すは一箇月住居の時を思ひ

于汝歸謂人曰光庭在春風中坐了

一箇月 汝州に明道先生居る時朱公於の先
生に謂て歸りて家人は謂曰汝に

游揚初見伊川伊川瞑目而坐二
子侍立既覺顧謂曰賢輩尚在此乎

日既晚且休矣及出門門外之雪深
一尺 游氏揚氏二人先生に謂見の
瞑目坐たり二人に侍坐るは良久

○劉安禮云明道先
生德性充完粹和之氣益於面背樂
易多恕終日怡悦立之從先生三十
年未嘗見其忿厲之容

安禮子の話説に先生の性徳ハ純粹温和の氣色す
これに於ては先生の面ハ何れも背ハ何れも樂易
ハたのしみと恕ハたのしみと吾身つめて人
のいさよと一の義と怡悦と一の自の

其自任すなり之
重也寧聖人を
學而未至さん
善と以て名と成
こと欲不寧一物
巴病と為一時之
利と以て己功也
欲不

其自信之篤也
吾志可行可
苟也其去就と潔
とせ不吾義の安
ず所小官と雖

屑とせ不所有

呂典叔撰渠先生の
行狀と撰て云く
康定兵と用ゆる之
時先生年十八慨然
自許上書して
范文正公に謁ハ公
其遠器カラスヤと
知く之と成就せん
と欲す乃之と責て
曰く儒者自ら名教
有何と兵於事也
人因て勸て中庸を
讀し先生其書

溫和の徳とつとつ徳音聲容体見現るる是と望て
うのハハ崇く深く押慢すたり何事に出遇て
則ち從容に優々として急迫するべ懇
其自任

之重也寧學聖人而未至不欲以一

善成名寧以一物不被澤為己病不

欲以一時之利為己功

吾任す一つの善事と不口之
人の地位に至らんことを欲ぐ天下の間に一物

其自信之篤也吾志可行不苟

潔其去就吾義所安雖小官有所不

屑

君上の為に吾志旨の行施さす
去くを潔くはせば美

○呂與叔撰橫

渠先生行狀云康定用兵之時先生

年十八慨然以功名自許上書謁范

文正公公知其遠器欲成就之乃責

之曰儒者自有名教何事於兵因勸

讀中庸先生讀其書雖愛之猶以為

未足於是又訪諸釋老之書累年盡

究其說知無所得反而求之六經嘉

風之聞而畏其義
小非人ハ也敢て一毫
と以て之に及不

横渠先生の曰二程
十四五の時便ち
脱然として聖人と
学んと欲す

○横渠先生曰二程從十四五時

便脱然欲學聖人

脱然といふはぬけぬけと
衆人は棄てぬ

程子兄弟のオハルバ十四五の時より聖人の所
為りしをいひて學びんとするの志有けり明道先生
定世書と作り二十三の作り伊川先生の好學論
ハ十九の時の作り勝国の時より祭酒林家
世々程朱天下の政とるるを按三国之教皆依
其土俗而設之教焉世土之俗暴且愚昧故威以
地獄非好用偽如来之妙也如漢土則可以教矣樂
天嘗謂二聖易地則皆然宜哉此言也如夫天朝則
清淨正直之地何假邪曲汚濁之論說雖然以四夷
威服故其人來朝異學隨來是以歷世之間稍々風
將移俗將習然而遂無害於神風之威
耀矣此乃三代史之所以有述作也云尔
于時癸未十一月
二十五日巳丑終

近思錄卷之十四

八尾

天保十四癸卯歲正月發兌

京都三條通堺町西入

出雲寺文治郎

江戸日本橋通壹丁目

須原屋茂兵衛

大阪心齋橋通唐物町南入

河内屋仁助

同全通南久宝寺町北入

河内屋直助

同全通唐物町南入

河内屋太助

三都書林

